

19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ

1851-1880 (5)

塩野和夫

第2章 アメリカンボード本部の宣教方針

1 ‘Annual Survey’ に見るボード本部の宣教方針¹⁾

2 「財政問題とその克服」と「女性宣教師の活躍」

はじめに

第1節では『ヘラルド誌』（*Missionary Herald*）1月号冒頭に掲載されている「一年の展望」（‘Annual Survey’）の検討により、中期を特色づけている事柄を明らかにした。

すなわち、初期（1851-60）に見られる「説教を中心とした伝道活動の重視」、南北戦争期（1861-65）に顕著な「財政問題とその克服」「現地人牧師・説教者・伝道者の育成」、展開期（1866-80）における「女性宣教師の活躍」「教育・印刷・医療活動による宣教活動の多様化」である。

初期・南北戦争期・展開期を特色づける事柄はいずれも各時期におけるボード本部の宣教方針と関係していた。つまり、「一年の展望」に認められた変化は本部宣教方針の展開を映し出している。そこで、第2節ではこれらの中から

1) 第2章第1節は「19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (4)」(『国際文化論集』第23巻、第2号、2009年)で発表している。

「財政問題とその克服」と「女性宣教師の活躍」
を取り上げて本部の動向を考察する

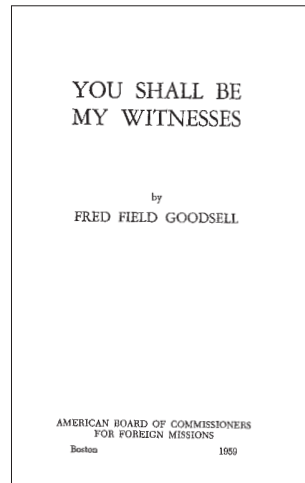
なお、2つの課題はいずれも F. F. Goodsell, *You shall be my Witnesses*, 1959²⁾に取り上げられている。そこで、グッセル (Goodsell) の論考を参考にしつつ考察を進める。

(1) 財政問題

財政問題として通常取り上げられるのは南北戦争に伴うボードの負債である³⁾。この負債について「幸運にも消滅した⁴⁾と言及したうえで、グッセルは19世紀アメリカンボードにはそれ以外に「2つの財政問題があった」と指摘する。

長老派リベラルグループのアメリカンボード撤退が与えた影響とカトリック諸国への宣教活動着手による1873-1876年における財政状況の悪化である⁵⁾。

まず、1861年に発生した負債に関する『ヘラルド誌』の記述を概観した上で、何が問題とされていたのかを明らかにする。なお、記述内容の変化に対応して3区分している。



F. F. Goodsell, *You shall be my Witnesses*, 1959

2) 次の通りである。

‘The Story of the Treasury : 1.’, F. F. Goodsell, *You shall be my Witnesses*, 1959, pp.209-226.

‘The Story of the Treasury : 2.’, F. F. Goodsell, *Ibid.*, pp.227-239.

‘The Women’s Board’s – Their Vision and Strength.’, F. F. Goodsell, *Ibid.*, pp.154-173.

3) W. E. Strong は ‘The Civil War’ の項目で 1861 年の負債に言及している。

‘The Civil War.’ W. E. Strong, *The Story of the American Board*. pp.307-308.

4) Goodsell は次の通り記している。

「アメリカンボードが南北戦争により深刻な収入の頓挫を経験するのではないかと恐れた人たちは幸運にも消滅した。注目すべきほどに危機的な状況にあってもボードの会計はあるべき形を維持した。一時的な 1861 年の後退の後に、2 万 8 千ドル近い赤字も負債のつぶやきさえなかった 8 年間の間に消滅した」。Goodsell, *Ibid.*, p.214.

5) Goodsell, *Ibid.*, pp.214-215.

1861年1月号の「一年の展望」⁶⁾にボードの負債に関する記述はない。5万ドルの支出超過の事実を突然報道したのは『ヘラルド誌』7月号の記事「ボードの財務状況」⁷⁾である。「3日後にサムター砦が攻撃され、6日後に大統領の宣戦布告がすべての村々に周知され、7万5千人の軍隊が招集された。……この時にあたって、『委員会は、5万ドルの不足金のために、委員会は活動の最も重要な分野における経費を切り詰めることによる傷を求めるべきか』という問いに直面している」。11月号に掲載されたアメリカンボードの年会における「会計報告」⁸⁾で正確な負債金額とそれに対する評価が記されている。「ボードの収支は実のところ27,885.34ドルの支出超過に陥っている。……したがって、この年度は比較的少額の負債を抱える状態となっている」。1862年1月号は冒頭に「1862年度予算」⁹⁾を掲載し、その中に前年度の負債金を加えている。「私たちは内戦のただ中にある。……このような状況にあって、大胆にも1862年度予算として341,337ドルを計上した。……27,886ドルの負債を加えると、369,223ドルになる」。1861年から62年の『ヘラルド誌』に見られる特色は2点ある。ボードの負債をアメリカの内戦と関連させた認識と支出超過の事実を金額面を含めて読者に的確に伝えようとする姿勢である。

『ヘラルド誌』1863年4月号に掲載された「財務声明」¹⁰⁾は率直に負債による活動への支障に言及している。「現在の削減された規模を越えて海外における活動の進展を計れないなど、11,000ドルの負債のために準備ができない」。11月号にある年会の「会計報告」¹¹⁾においても負債による障害に触れている。「一方、ボードが新年に着手すべき事業に対して、比較的少額であるにもかかわらず、負債による妨げがあったことは残念に思われる」。1864年2月号の

6) 'Annual Survey of the Missions of the Board. January 1861' *The Missionary Herald*, January 1861, pp.1-13.

7) 'Finances of the Board.' *The Missionary Herald*, July, 1861, pp.219-220.

8) 'Treasurer's Report.' *The Missionary Herald*, November, 1861, p.324.

9) 'Appropriations for 1862.' *Missionary Herald*, January, 1862. pp 1-2.

10) 'Financial Statement.' *The Missionary Herald*, April, 1863. pp.97-98.

11) 'Treasurer's Report.' *The Missionary Herald*, November, 1863. pp.325-326.

「ボードの収入」¹²⁾は負債金の削減に言及している。「年度当初にあった負債は6,185ドルまで削減した」。5月号の「財政の見通し」¹³⁾でも負債による障害に触れている。「残されている会計年度の5か月間に希望される収入は、負債に妨げられるため望まれる進展を加えないで、281,000ドルである」。1863年から64年における『ヘラルド誌』は負債が着実に削減されていく事実を伝える一方で、支出超過によりボードの活動が制限されている現状を繰り返し報告している。

1865年に入ると負債に関する記述に変化があり、前向きに明るく述べられている。1865年1月号の「一年の展望」¹⁴⁾は「支出超過がほとんど消滅した」と述べている。「1861年の会計年度の終わりに、ボードは280,000ドルに近い負債を抱えた。それから3年に及ぶ巨大な戦費を要する戦いが続き、その間も着実に増加する海外での宣教活動に要する費用を負担し、そして今ほとんど支出超過のない状態で会計年度を終わろうとしている」。8月号の「会計年度の終わりにあたって」¹⁵⁾はついに負債が消滅した事実を力強く報告している。「負債なしでこの年度を終えることによる根拠は非常に力強いものがある」。このように1865年の『ヘラルド誌』は一転して明るく力強い語調で、「支出超過がほとんど消滅した」（1月号）と報告し、ついに「負債なし」（8月号）と伝えている。

次にアメリカ長老派のアメリカンボード離脱に伴う影響についてである¹⁶⁾。長老派は1812年にボードの有力な支持団体となり、運動に参加している。ところが、1836年に保守グループが「長老派の海外宣教団体の組織化」を決議し、

12) 'Receipts of the Board.' *The Missionary Herald*, February, 1864. pp.33-34.

13) 'The Prospects of the Treasury.' *The Missionary Herald*, May, 1864. pp.129-130.

14) 'Annual Survey of the Missions of the Board.' *The Missionary Herald*, January, 1865. pp.1-2.

15) 'End of the Financial Year.' *The Missionary Herald*, August, 1865. pp.224-225.

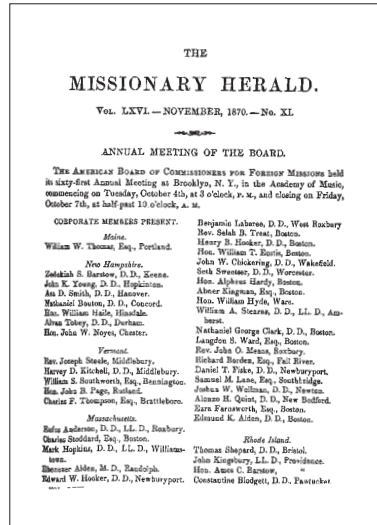
16) 長老派のアメリカンボード撤退に関して、アメリカ（オランダ）改革派教会とアメリカ（ドイツ）改革派教会については触れない。これらについては下記で言及している。参照、'The Ecumenical Spirit of the American Board.' F. F. Goodsell, *Ibid.*, pp.124-137. 'Withdrawal of Cooperating Churches.' W. E. Strong, *Ibid.*, pp.309-310.

1839年以降には独自の運動を始めた。1870年にリベラルグループと保守グループが合同すると、リベラルグループも長老派の海外宣教団体に参加した。

時期的な事情もあり、ここでは1870年の長老派教会の合同に伴うリベラルグループの離脱について見ておきたい。この出来事に財政問題としての性格があることをグッセルは指摘していた。確かに長くアメリカンボードを支えてきたリベラルグループの離脱は組織内部に衝撃を与え、財政問題を伴ったに違いない。ところが、『ヘラルド誌』やストロング(Strong)の叙述に同様の指摘は見当たらない。彼らはむしろ前向きにとらえて

いる。『ヘラルド誌』(1870年11月号)に掲載されている年会報告の「組織」¹⁷⁾と「会計報告」¹⁸⁾はいずれもリベラルグループ離脱に言及していない。また「会計報告」は順調な会計状況を報告している。ストロングは「結果的に活力を与えている」と説明している。「1870年に長老派の両グループが再統合したことにより、リベラルグループは58年にわたって外国宣教活動の関係を保ってきたアメリカンボードの支援から離れた。……彼らの脱退はすべての関係者から残念に思われた。……しかし、この分裂は結果的に活力を与えている」¹⁹⁾。

最後にカトリック諸国への1870年代における宣教活動着手の影響を見てきたい²⁰⁾。グッセルは具体的な金額を提示して指摘する²¹⁾。「新しい事業への予想された追加支援は具体化に失敗して年ごとの支出超過という結果となった。すな



「ボードの第61回年会報告」
 (『ヘラルド誌』1870年11月号)

17) 'Organization,' *The Missionary Herald*, November, 1870. pp.343-344.

18) 'Treasure's Accounts,' *The Missionary Herald*, November, 1870. p.344.

19) W. E. Strong, *Ibid.*, p.310.

わち、1873年に26,086.25ドル、1874年に30,441.07ドル、1875年に44,323.96ドル、1876年に31,050.22ドル、1877年に47,985.94ドルである」。

『ヘラルド誌』の関連記事を調べてみると、グッセルの立場は『ヘラルド誌』の報告に依拠していることが分かる。次の通りである。『ヘラルド誌』の1873年11月号が掲載する年会報告における「会計報告」²⁰⁾に言及はない。1874年11月号の年会における「会計報告」²¹⁾に負債総額が出てくる。「1874年9月1日付でボードの負債総額は30,441.07ドルであった」。1875年11月の年会報告には「財政上の課題」²²⁾という項目を設け、「決議する。……新しい運動として言及されているカトリック諸国における活動は、できるだけ正確に出来るだけ速やかに取り扱いの一体化を他の国々におけるボードの活動とはかるべきである」と報告している。「会計報告」²³⁾では負担総額を報告している。「1875年9月1日付でボードの負担総額は44,323.96ドルであった」。1876年11月号の年会報告における「会計報告」²⁴⁾では、「1876年9月1日付でボードの負債総額は31,050.22ドルで、昨年より約13,000ドル減少していた」と報告している。1877年11月号の年会報告には「負債の消滅—クラーク博士の記録—」²⁵⁾が記載されている。「集会を終える前にボードの負債として支払う必要のある全額48,000ドルは抵当に入れられたという報告があった」。「木曜日の夕方—会計報告—」²⁶⁾に「増加した負債は47,985.94ドルと報告されたので、残念に思う」とある。

20) ストロングはカトリック諸国における活動に言及するだけでボードの負債問題には触れていない。

‘Chapter 13 In Nominally Christian Lands’, W. E. Strong, *Ibid.*, pp.290-304.

21) F. F. Goodsell *ibid.*, p.215.

22) ‘Treasurer’s Accounts.’ *Missionary Herald*, November, 1873. pp.353-354.

23) ‘Treasurer’s Accounts.’ *Missionary Herald*, November, 1874. p.347.

24) ‘The Financial Problem.’ *Missionary Herald*, November, 1875. p.346.

25) ‘Treasurer’s Accounts.’ *Missionary Herald*, November, 1875. pp.346-347.

26) ‘Treasurer’s Accounts.’ *Missionary Herald*, November, 1876. pp.367-368.

27) ‘Payment of the Debt. — Dr. Clark’s Paper.’ *Missionary Herald*, November, 1877. p.360.

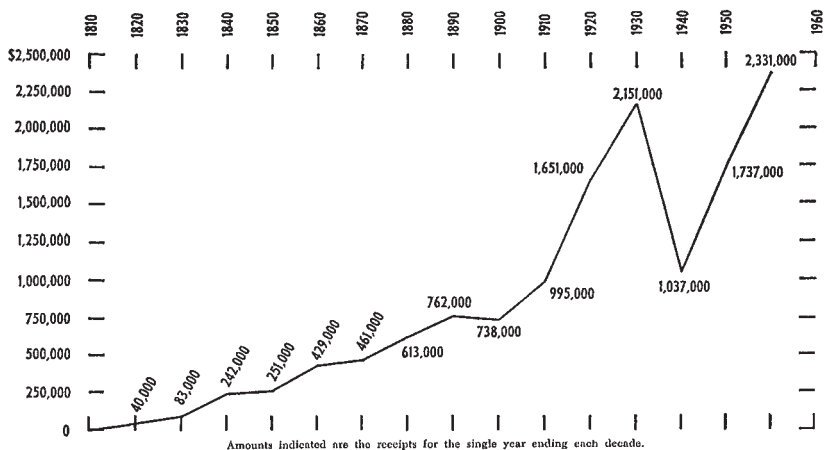
28) ‘Thursday Evening — Treasurer’s Report.’ *Missionary Herald*, November, 1877. p.367.

(2) 財政問題の克服

19世紀中期（1851～1880）のアメリカンボードには「3度にわたる財政問題が発生していた」と認識されている。すなわち、1861年から1865年に及ぶ負債問題、長老派リベラルグループの離脱によって生じた1870年の組織的問題、「新しい運動」と呼ばれたカトリック諸国への宣教活動開始に伴う財政状況の悪化である。ただし、「これらはいずれも克服され、19世紀後期（1881～1910）における活動へと進展した」とされる。しかしながら、いかにして克服されたのか。必ずしも単純ではない事情を考察したい。なお、検討を進めるうえでグッセルの「アメリカンボードの10年ごとの収入—1820年から1956年まで」²⁹⁾を参考にする。

まず、1861年から65年までの負債問題である。『ヘラルド誌』によると、南北戦争中であつたにもかかわらず負債金額は着実に減少していた。

表3 アメリカンボードの10年ごとの収入—1820年から1956年まで—



29) 'Total Receipts of the American Board at the End of Each Decade 1820-1956.' Goodsell, Ibid, p.293.

- 1861年11月号 「27,885.34ドルの支出超過に陥っている」。
- 1863年2月号 「11,000ドルの負債」
- 1863年11月号 「比較的少額の負債」
- 1864年2月号 「負債は6,185ドルに削減」
- 1865年1月号 「支出超過がほとんど消滅」
- 1865年8月号 「負債なし」

ところで、1861年度の負債額27,885.34ドルは当時のボードにとってどのような金額であったのか。ヒントは表3にある。表3によると、1860年度の収入合計は429,000ドルで、27,885.34ドルは前年度収入の約6.5パーセントに当たる。つまり、28,000ドル近い負債は金額としては大きかったが、収入合計からすると「ボードの活動に致命的な打撃を与えることはなかった」と推定できる。

表3から読み取れる重要なポイントがもう1点ある。いかにしてボードが負債金を削減し、1865年に「負債なし」という状況に至ったのかである。表3によると1860年度から着実に収入合計額は増加し、1870年度には461,000ドルとなっている。仮に増加分を10等分して「毎年度3,200ドルずつ増加した」と仮定すると、次のように推定できる。

		増加額 (1860年度比)	増加額の累計 (1862年度より)
1860年度	429,000ドル		
1861年度	432,200ドル	3,200ドル	
1862年度	435,400ドル	6,400ドル	3,200ドル
1863年度	438,600ドル	9,600ドル	9,600ドル
1864年度	441,800ドル	12,800ドル	19,200ドル
1865年度	445,000ドル	15,000ドル	32,000ドル

1862年度から65年度までの増加額の累計は推定で32,000ドルである。これは負債金の28,000ドルを超えている。この事実から「会員の募金によって負債は

解消された」と推定できる。もう1点は「1862年から65年にかけて負債にもかかわらずボードは海外における宣教現場での活動を維持した」と考えられることである。『ヘラルド誌』の関連記事もこれらの推測を支持している。

次に長老派リベラルグループの離脱に伴う財政問題である。この問題に対して、グッセルと『ヘラルド誌』それにストロングはそれぞれ異なった立場に立つ。

グッセルは‘The Story of the Treasury: 1’において財政問題³⁰⁾を指摘していた。対照的なのが『ヘラルド誌』である。『ヘラルド誌』は1870年11月号の年会報告における「組織」や「会計報告」でリベラルグループの離脱に触れないだけでなく、「本部報告」³¹⁾で「特に多くの長老派に属する宣教師が残留するであろう」と楽観的な見通しを述べている。両者の中間的な立場に立つのが、「この脱退はすべての関係者から残念に思われた。……しかし、この分裂は結果的に活力を与えている」とするストロングである。なお、1870年前後の収入の順調な推移を示す表3は「表面的にはヘラルド誌やストロングの立場を支持している」と考えられる³²⁾。

最後にカトリック諸国への活動開始に伴う財政問題である。この問題に対して『ヘラルド誌』とグッセルは共通した認識を示し、ストロングが異なった立場に立っている。

『ヘラルド誌』とグッセルは1873年度から77年度における各年度の負債金額を提示し、これをカトリック諸国への宣教活動と関連付けている。各年度の負債金は次の通りである。

1873年度	26,086.25ドル
1874年度	30,441.07ドル
1875年度	44,323.96ドル

30) 参照, Goodsell, Ibid., p.215.

31) ‘Home Department.’ *The Missionary Herald*, November, 1870. pp.344-345.

32) ストロングは海外宣教地特にインドとトルコにおける自給教会の存在と彼らの支援が負債の削減に貢献したとする。W. E. Strong, Ibid., p.308.

1876年度 31,050.22ドル

1877年度 47,985.94ドル

「新しい運動」と呼ばれたカトリック諸国への宣教活動の特色は相次ぐ撤退である。1873年に活動を始めたイタリアでは1874年に撤退している。1872年に宣教師を派遣したスペインでも1870年代に撤退している。1872年に宣教師を派遣したオーストリアでも間もなく撤退している。唯一活動が19世紀後期（1981年-2010年）へと継続されたのは、1872年に活動に着手したメキシコである。相次ぐ撤退は新しい運動を財政状況の悪化と結びつける評価が関係していたのかもしれない。

それに対して、ストロングはカトリック諸国における宣教活動を現場から考察する。すなわち、各地における困難な活動の課題と状況を宣教師の立場に立って考えるのである。そこにボードの負債問題が入り込む余地はない。そもそも財政はボード全体の問題でこれを新しい運動と関連付けるには無理がある。それにもかかわらず関わらせたのは「カトリック諸国への宣教活動着手に対する否定的な評価があった」と思われる。したがって、1870年代におけるカトリック諸国への活動に対しては、活動現場から発想するストロングと本部の財政問題から考える『ヘラルド誌』とグッセルの立場があったと言える。

なお、19世紀後半（1881年-1910年）にはメキシコにおける宣教活動が継続されただけでなく、スペインとオーストリアにおいても再開されている³³⁾。

(3) 女性宣教師の活躍

19世紀中期の展開期（1866-80）における顕著な動向の一つとして女性宣教師の活躍があげられる。アメリカンボードの活動現場を担う女性の比率は次第に上がっていて、南北戦争期（1861-65）に宣教師はほぼ男女同数になっていた³⁴⁾。それにもかかわらず、展開期に女性宣教師の活躍が一段と顕著になる。なぜなのか。

33) 参照, 'Chapter 25 In Papal Lands.' W. E. Strong, *Ibid.*, pp.456-474.

決定的な理由として指摘されるのがボードを支援する女性団体の組織化で、次の通りである。

1868 Woman's Board of Missions, Headquarters in Boston.

(「W.B.M.」と略記する)

1868 Women's Board of the Interior, Headquarters in Chicago.

(「W.B.M.I.」と略記する)

1873 Woman's Board of the Pacific, Headquarter in Oakland

(「W.B.M.P.」と略記する)



Sarah L. Bowker
President, Woman's Board of Missions
(1868-1890)

女性団体の組織化により女性宣教師が主体的に参加できる環境は整った。この変化をグッセルは次のように指摘している。「まず1810年-1868年の時期に、女性は背後にあって、熱心ではあるが相対的に静かであった。次いで1868年-1927年の時期になると、女性は躊躇することなく彼女たちの才能と献身を主張した」³⁵⁾。ストロングも指摘している。「これらの団体の組織化により、新しい機会が彼女たちの活動のために見いだされていった」³⁶⁾。

なお、各団体によって派遣された女性宣教師が活躍した地域は次の通りである³⁷⁾。彼女たちがどれほど広範に活躍していたかが分かる。

34) 展開期以前の女性宣教師の活動については以下で言及されている。

‘Work for Women.’ Strong, *Ibid.*, pp.221-223.

Goodsell, *Ibid.*, pp.154-157.

35) Goodsell, *Ibid.*, p.154.

36) W. E. Strong, *Ibid.*, pp.311-312.

37) Goodsell, *Ibid.*, p.163.

Africa :	W.B.M.	W.B.M.I.	
Austria :	W.B.M.		
Bulgaria :		W.B.M.I.	
Ceylon :	W.B.M.	W.B.M.I.	
China :	W.B.M.	W.B.M.I.	W.B.M.P.
Dakota Indians :	W.B.M.I.		
India :	W.B.M.	W.B.M.I.	W.B.M.P.
Japan :	W.B.M.		W.B.M.P.
Mexico :	W.B.M.	W.B.M.I.	W.B.M.P.
Micronesia :	W.B.M.	W.B.M.I.	
Near East :	W.B.M.	W.B.M.I.	W.B.M.P.
Spain :	W.B.M.		

女性団体の設立による女性宣教師の活躍は具体的にどのようなものであったのか。各地域の現場における活動に関しては、ストロングが具体的に述べている。彼の叙述から検討を加える。

まず、巡回伝道である。インド・セイロンにおける活動に次の記載がある。「W.B.M.の組織化により……女性のための活動が明確な一つの分野となった。……アメリカ女性によるテント集会に向けた村々への巡回が新たな関心呼び起こし、ある村では800名の女性の参加者があった」³⁸⁾。トルコ・レバノンの活動でも巡回伝道が報告されている。「W.B.M.の組織化により女性のための活動はたちまちに組織化され発展した。女性宣教師は特別な使命を帯びて巡回した」³⁹⁾。巡回伝道はボードの宣教師が各地域で実施した有力な伝道方法の一つである。インド・セイロン及びトルコ・レバノンにおける報告は、女性団体の設立に刺激された女性宣教師が新たな可能性を巡回伝道に開拓したことを推測させている。

38) 'Woman's Work for Woman.' W. E. Strong., Ibid., pp.180-182.

39) 'Work for Women.' W. E. Strong., Ibid., pp.221-223.

女性に対する教育活動は巡回伝道より多く見られる。トルコとレバノンの活動における記載である。「1872年にコンスタンティノーブルで女子寄宿学校がW.B.M.によって始められた。わずか2名で開始されたこの学校に大変な期待が寄せられ、だれも予想しなかったコンスタンティノーブルにおける重要な女性のためのアメリカ式大学へと発展した」⁴⁰⁾。日本の報告でも女子教育に言及している。「いくつかのW.B.の団体は早い時期に女子と女性のための学校設立にかかわっている。1873年にタルカット女史(Miss Talcott)とダッドレー女史(Miss Duddley)は神戸で女子に教え始めている」⁴¹⁾。女性団体との関わりは不明であるが、アフリカでもこの時期に女子学校開設が伝えられている。「1869年にエドワーズ女史(Mrs. M. K. Edwards)がInandaに南アフリカ最初の現地人女子を対象とした学校を開設し、現在に至っている。……同様の学校が1873年にアフリカ南部の少女のためにUmzumbeに開かれている」⁴²⁾。メキシコでも関連は不明であるが、学校の開設が報告されている。「ストロング女史(Miss Strong)のMonfereyにおける学校は13名の女子を教えているが、数名の若い男性も教育課程に従って学んでいる。宣教活動が育っていくならばミッションセミナリーは緊急の課題である」⁴³⁾。女性団体の設立により顕著に認められた事業の一つに女性宣教師による女子教育がある。彼女たちは女性に対する初等教育・中等教育・高等教育に従事しただけでなく、女性の現地人伝道者の育成にも貢献した。

女性団体のアメリカンボードへの貢献の一つに、多額の寄付が指摘されている。これに関してはグッセルの指摘⁴⁴⁾を引用しておきたい。「1879会計年度を通して女性団体がアメリカンボードの会計に寄付した総額は、73,957.04ドルに及ぶ。これはこの会計年度の収入合計のほぼ15パーセントに当たる」。

40) W. E. Strong., Ibid., p.222-223.

41) 'Schools Opened.' W. E. Strong, Ibid., 269-271.

42) W. E. Strong., p.286.

43) W. E. Strong., Ibid., p.303.

44) F. F. Goodsell, Ibid., p.165